

ヨハネの手紙第一4章7-21節 「神から流れる兄弟愛」

1A 神から出る愛 7-10

2A 私たちにとどまる神 11-18

1B 互いへの愛 11-12

2B 御霊による証し 13-15

3B さばきの日の確信 16-18

3A 神を愛している者 19-21

本文

ヨハネの手紙第一 4 章を開いてください。私たちの学びは、先週 4 章 6 節まで来ましたので、7 節から見ていきます。ヨハネは 3 章 23 節で、「**私たちが御子イエス・キリストの名を信じ、キリストが命じられたとおりに互いに愛し合うこと、それが神の命令です。**」と書いていました。御子イエス・キリストを信じることについては、4 章 1-6 節について話してました。イエス・キリストを告白しない霊は反キリストの霊であり、告白する霊が神からのものであると話してました。そして、7 節から、「**キリストが命じられたとおりに互いに愛し合うこと**」について、これから話します。すでに 2 章 7 節以降で、イエスご自身からの新しい命令として教えていた内容です。

1A 神から出る愛 7-10

⁷ 愛する者たち。私たちは互いに愛し合しましょう。愛は神から出ているのです。愛がある者はみな神から生まれ、神を知っています。⁸ 愛のない者は神を知りません。神は愛だからです。

私たちが互いに愛し合う理由として、「愛は神から出ている」とあります。神は愛です。ですから、神は愛でないことができません。神を知っているというならば、その人は愛があるのです。そして愛がなければ、その人は神を知りません。ギリシア語には、「知る」という言葉に、二つあります。一つは、直感で知ることです。そしてもう一つが、経験で知ることです。ここでは、経験で知る、ギノースコウが使われています。神を体験的に知っているならば、その人は愛のある人なのです。

神が愛だということを、私たちはどんなことがあっても、根本真理として知らないといけません。神が慈愛に満ちていることを知っているか知っていないかで、信仰生活のすべてが変わります。神が愛であることを知らない人は、つまずいて、信仰から離れるでしょう。世は、「神は愛であるなら、どうしてこのような悪いことが起こるのか。」と絶えず、挑んでいるからです。ヨブも、神の慈しみ深さについて、悪魔からの挑戦を受けました。彼は、神に苦しみをずっと吐露してました。そして神が現れてくださり、彼は悔い改めました。このように立ち直ることができたのは、神が慈しみ深いことを知っていたからです。「ヤコブ 5:11 見なさい。耐え忍んだ人たちは幸いだと私たちは思いま

す。あなたがたはヨブの忍耐のことを聞き、主によるその結末を知っています。主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられます。」

これまでヨハネは、この手紙で、神を知っていることの基準を語ってきました。光の中を歩んでいる事。神の命令を守っていること。義を行うこと。そして、ここにある愛のあることです。「知っている」ということについて、知的なこととして受け入れているだけでは、足りないことを徹底的に教えています。ユダヤ人たちがイエスに、「私たちの父はアブラハムです」「私たちにはひとりの父、神がいます。」と言いましたが、彼らは、この方を石打にしようとした。殺そうとしたのです。憎しみや殺意があっても、神を父として知っているということが出来るのです。だから、その歩みの中に、神を知っているかどうかの基準があります。

⁹神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって 私たちにいのちを得させてくださいました。それによって 神の愛が私たちに示されたのです。¹⁰ 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

私たちが、どのようにして、神の愛を知ることができるのでしょうか？それをヨハネは、ここに説明しています。神がそのひとり子を遣わされたというところに、愛が示されています。もし、神の愛を疑ってしまうのであれば、人として来られたキリストを見るのです。

二つのことを、ヨハネは語っています。一つは、この方が私たちのいのちを下された、ということです。ご自身にあるいのちを、私たちにくださいました。主ご自身がすべてを、私たちのために明け渡してくださいました。ここに愛があります。もう一つは、私たちの罪が赦されて、神の御怒りを受けないようにして下さったことです。その罪の赦しのために、宥めのささげ物、すなわち神の、罪に対する正しい裁きを身代わりに受けて下さった、ということです。ここに愛があります。

午前礼拝でも話しましたが、この愛というのが、アガペです。与える愛です。犠牲の愛です。ご自身のいのちを与え、ご自身は、私たちの罪ゆえに御怒りの的になることを厭わない愛です。そして、罪を犯し反抗している者たちのために、ご自分の独り子をその身代わりに死に渡すなどという、とんでもない、とてつもない愛を示されたのです。私たちは、少しでも神の愛を疑った時、このことを思い出すとよいです。

2A 私たちにとどまる神 11-18

1B 互いへの愛 11-12

¹¹愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛して下さったのなら、私たちもまた、互いに愛し合うべきです。

私たちの互いへの愛は、いつも、神がこれほどまでに愛してくださったというところに基づきます。私たちが、同じ兄弟を愛するのに難しさを覚える時に、自分自身に対する神の愛の偉大さを思えばよいのです。一万タラントを帳消しにするような王が、神です。6 千万デナリに相当しますが、1 デナリは一日の労賃に値します。一日 1 万円だとすると、6 兆円の金額です。それを、百デナリ自分から借りている人を赦せないということが、しばしば起こります。どれほど大きな愛、どれほど大きな恵みの中に私たちが生きているのかを忘れず、思い起こす必要があります。

¹² いまだかつて神を見た者はいません。私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにとどまり、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。

ここは、とても大切なことです。「いまだかつて神を見た者はいません」という言葉、ヨハネの福音書 1 章、18 節にも出てきます。「父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」とありますが、独り子以外は、だれも見ることがありません。そして神は霊ですから、見ることができないのです。

では、人が、神がおられることを具体的に認める時に、何が必要なのでしょうか？多くの人は、しるしを求めます。何か力を求めます。目に見える何かですね？けれども、イエスは、確かに多くの奇跡を行われましたが、愛によって父なる神を示されました。十字架につけられた時は、そこからおりませんでした。神の愛を全うされるためです。その愛によって、神が確かにここにおられると、人々は知るので。「ヨハ 13:35 互いの中に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります。」

そして、「神の愛が私たちのうちに全うされる」とあります。全うするというのは、十分に成熟するという意味合いです。神の愛の目的は、互いに私たちが愛し合うことにあるということです。互いに愛し合っているところに、神の愛が十分に成熟した形で現れるということです。

2B 御霊による証し 13-15

¹³ 神が私たちに御霊を与えてくださったことによって、私たちが神のうちにとどまり、神も私たちのうちにとどまっておられることが分かります。

12 節において、互いに愛し合う中で、神が私たちのうちにとどまるという約束がありますが、神がとどまってくださっている、また私たちが神にとどまっているという確証を与えてくださるのが、御霊の働きです。

まず、とどまるということについて、両方向になっていることに気づいてください。私たちが神のうちにとどまっています。そして、神が私たちのうちにとどまっています。これは、物理的に考えた

ら無理です。けれども、霊においては可能です。両方向でとどまる関係を、1 章では「交わる」という言葉で言い表していました。イエス様も、両方向のとどまることについて語られていました。「ヨハ 6:56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります。」

ヨハネは、イエスが最後の晩餐の席から、ゲッセマネの園に行かれるまでのところで語られていた会話を、福音書 13 章から 17 章までで書き記しています。そこには、互いに愛すること、神の命令を守ること、祈りを聞いてくださることなどの約束を語っておられました。その間を織り込むようにして、もうひとりの助け主と呼ばれていた、御霊が来られる約束を語っておられました。例えば、14 章 15-16 節です。「15 もしわたしを愛しているなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずで、16 そしてわたしが父にお願いすると、父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにして下さいます。」ここでは、イエスへの愛が、この方の戒めを守るというかたちで現れますが、その助けてくださる方が聖霊であることが分かります。

今、互いに愛するという神の命令を守ることにおいて、御霊がその働きを助けてくださるということが分かります。聖霊の働きによって、父なる神からの愛が御子にあって流れてきて、それで互いに愛するかたちで全うされていくのです。ガラテヤ書には、御霊の実が愛であることを教えています。「5:22-23 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、23 柔和、自制です。このようなものに反対する律法はありません。」ここのギリシア語の文法は、一つだけになっています。御霊の実は愛であって、その愛の現われが、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制だということです。これで、御霊によって、愛しなさいという命令を行うことがわかります。

¹⁴ 私たちは、御父が御子を世の救い主として遣わされたのを見て、その証しをしています。¹⁵ だれでも、イエスが神の御子であると告白するなら、神はその人のうちにとどまり、その人も神のうちにとどまっています。

神がとどまってくださり、私たちが神にとどまる時、その確証を与えるのは御霊ですが、私たちのほうが、まず、イエスを神の御子と告白することによって可能になります。

そして、イエスが神の御子であることを、まず教えているのは、私たちと言っている、使徒たちのことです。「1:1-2 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目で見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて。2 このいのちが現れました。御父とともにあり、私たちに現れたこの永遠のいのちを、私たちは見たので証して、あなたがたに伝えます。」イエスの公生涯で、共に生活し、この方の復活を目撃したのが、彼らです。他にも大勢の弟子たちがいましたが、主イエスご自身が、ご自身の使徒として選ばれた者たちです。

そして、その証しに基づいて、イエスが神の御子と告白するのです。そうすれば、すぐに神はその人のうちにとどまり、またその人の神のうちにとどまります。これはいったい、どうしてでしょうか？告白ということが、なぜそうしているのでしょうか？それは、御子にあってすべてのことをしてくださったからです。また、聖霊も遣わしてくださっているからです。すでに、罪の赦しをキリストにあって用意しておられます。そして聖霊によって、すぐにでもそれを与えたいと願われています。

自分が何か大それたことをする必要はなく、ただ、口で告白して、心で信じることによって、神が救いに必要なすべてのものを提供して下さるのです。「ロマ 10:8-10 では、何と書いていますか。「みことばは、あなたの近くにあり、あなたの口にあり、あなたの心にある。」これは、私たちが宣べ伝えている信仰のことばのことです。なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせたと思えば、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」

私の両親が、私が伝道していたある言葉で、神のことが分かった大きなきっかけになったことを教えてくれました。私が「神は、すぐそばにいるんだよ」と言ったそうです。ずっと遠くにいて、それをつかみとるのではなく、すべてを神が用意しておられて、それでただ心で受け入れて、告白するだけなのだということです。

3B さばきの日の確信 16-18

¹⁶ 私たちは自分たちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛のうちにとどまる人は神のうちにとどまり、神もその人のうちにとどまっておられます。

ヨハネは、9 節と 10 節で語ったことを繰り返しています。神が、自分たちに対して愛を示されました。御子を遣わし、私たちにいのちを得るようにしてください、また、罪のために、御子を宥めのささげ物とされました。ここに愛があります。この愛を知りました。この知るは、ギノースコウ、体験的に知っているということです。さらに、「信じています」と言っていますね。愛は、信頼関係に及びます。神の愛を知ったので、私たちは神に安心して自分の身を任せることができます。そして、愛されているのか？と疑ってしまう状況の中でも、なおのこと神を信頼して、確かに神は愛しておられるのだとみなすことができるのです。

それから改めて、「神は愛です」と言っています。これは、本質を示している言葉です。神には愛があると述べていないのです、神は愛ですと述べています。同じように、1 章 5 節には「神は光であり、神には闇が全くないということです。」とあります。神が光ではない時がないのです。同じように、神が愛を持っていないということはないのです。神がなさること、言われることのすべてが、愛からしか出ていないのです。

ですから、ヨハネは愛を強調しています。キリストを信じる者が、力よりも愛を。知識よりも愛を。信仰深さよりも愛をすぐれたものとみなし、そこにとどまっている時に、神のうちにとどまっていて、また神もその人のうちにとどまっています。

¹⁷ こうして、愛が私たちにあって全うされました。ですから、私たちはさばきの日に確信を持つことができます。この世において、私たちもキリストと同じようであるからです。

ヨハネは、「全うする」という言葉を繰り返しています。12節には、私たちが互いに愛すると、神が私たちのうちにとどまって、それで愛が全うするとありました。神のうちにとどまり、神が私たちにとどまっている時に、愛が全うします。

そして愛が全うされているところでは、神の正しいさばきの日にも、確信を持っていることができます。神の御怒りは、十字架につけられた御子にあって満たされました。神はここまでして私たちを愛し、和解してくださいました。ですから、神が御怒りを現す終わりの日、すでにキリストにあって和解した私たちは、そのさばきを恐れることなく、むしろ大胆にいられるのです。

パウロは、キリストが罪人である私たちのために死なれたところに、神がご自身の愛を示していると、ロマ5章で話しています。そして次に、こう言っています。「ロマ5:9-11 ですから、今、キリストの血によって義と認められた私たちが、この方によって神の怒りから救われるのは、なおいっそう確かなことです。敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させていただいたのなら、和解させていただいた私たちが、御子のいのちによって救われるのは、なおいっそう確かなことです。それだけではなく、私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を喜んでいます。キリストによって、今や、私たちは和解させていただいたのです。」

ですから、主が来られて、世をさばかれる時に、大いに喜ぶことができます。黙示録の最後では、御霊と花嫁が、主イエスよ、来てくださいと願っているところが出てきます。そしてイエスが、「しかし、わたしは来る」と約束してくださっています。

そしてヨハネは、理由を話していますね。「この世において、私たちもキリストと同じようであるからです。」と言っています。3章2節では、「私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。」とあります。将来、キリストに似た者になりますが、すでにそのようになると約束されており、神の目には、すでにそのようになっているのです。「ロマ8:30 神は、あらかじめ定めた人たちをさらに召し、召した人たちをさらに義と認め、義と認めた人たちにはさらに栄光をお与えになりました。」栄光の姿に変えられるのは将来ですが、過去形になっています。

キリスト者は、キリストに結ばれているものです。イエス様は聖霊によってマリアから生まれまし

たが、私たちは神の霊によって新しく生まれ、神の子どもとなりました。イエスは聖霊に満たされて、力強い宣教の働きを行われましたが、私たちも聖霊の力によって、イエスを証しするようになっていく。そして、イエス様が十字架につけられ、よみがえられましたが、私たちは、罪に支配された古い人が十字架につけられ、新しい人によみがえりました。そして、主が体をもってよみがえられたように、よみがえるのです。そして、主は天に昇られ、父のみもとに行かれましたが、私たちも天に引き上げられ、この方であって、天の座に着きます。そして、キリストは天から地上に戻って来られます。その時に、私たちも神の栄光のうちに現れます(コロ 3:4)。キリスト者は、その呼ばれた名のごとく、キリストに結ばれたように、キリストのようであるのです。

¹⁸ 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。恐れには罰が伴い、恐れる者は、愛において全きものとなっていないのです。

私が信仰をもって間もなくして、初めて祈り会というものに集いに行った時のことでした。教会堂の階段にこのみことばが掲げられていて、強烈な印象を持ったのを覚えています。愛と恐れが、こうもつながっているのだ！と思いました。つながっていると、考えもしなかったのです。そして、私が知っている愛というものと、神の愛はとんでもなく違うものなのだと分かりました。

私の知っている愛は、限定的なものなのです。自分が何か愛されるものが自分の側にあって、それで愛されるのです。だから、自分が愛されるために、自分が努力しなければいけません。けれども、自分が愛されないという恐れを、深いところで持っています。なぜなら、自分は完璧ではないからです。それで、愛が全うされていないのです。全うされていない愛では、表面的な付き合いしかできないのです。

しかし、無条件の愛には恐れがありません。恐れをしめだします。自分がどんな状態であろうが、どんなことをしていようが、神は自分を愛しておられる、ということを知れば、そこに底知れぬ安心が生まれます。心を安らにすることができます。「ロマ 8:15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。」再び恐怖に陥れるとは、私たちが罪ゆえに死に、その後、さばきを受けるという恐怖です。その死と死後のさばきの恐れの中に閉じ込められているのを、「奴隷の霊」と、パウロは表現しています。けれども、私たちは、無条件に私たちを子どもとして愛しておられる父の御霊を受けています。だから、この正しい、聖なる方を「アバ、父」と呼ぶことができるのです。

その逆に、まだ恐れているということは、まだ愛が全うされていません。恐れているということは、罰を受けるかもしれないと思っているからです。私たちが、神の命令を守れないというのは、自分がきちんとしていないからではないのです。愛が全うされていないからです。神の命令について、神に愛されていることを知れば、それは自分にとっての益であることを知ることができます。だから、

神に信頼して、その命令に聞き従うことができるのです。これが、成熟した愛の関係です。

けれども、まだ神に信頼を寄せない時は、恐れがあるので、従いきれないのです。恐れとは、自分で自分を守ると言う意味で、高ぶりです。自分を主の前で砕いていただき、裸になって、ちょうど裸の赤ん坊がお母さんの胸に抱かれるように、神の愛に抱かれたいといけないうのです。

一見、矛盾しているようですが、自分が変えられないと神に変えていただけないと思っている人は、決して変えられることはできません。自分のありのままの姿で神が愛しておられることを本当に知れば、その人は変えられるのです。自分は神にありのまま愛されているから、そのままの自分でいても平気なのだと思っている人は、実は、ありのままの自分ではなくて、繕っている自分しか神に見せていない可能性があります。自分の真実、罪のある自分を見せていないのです。その罪ある自分を光に照らしていただいて、なおかつ受け入れられていることを知って、初めて無条件の愛を知るのです。

3A 神を愛している者 19-21

¹⁹ 私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。

愛しています、とは、神を愛しているということです。午前礼拝で詳しくお話ししました、順番がものすごく大事です。自分が神を愛したから、神に愛されるのでは絶対にありません。神がまず、愛してくださったから、私たちは愛しています。順番をあべこべにしてしまうのは、愛されるというのが、私たちは根っこから、自分が愛されるにふさわしいから愛されるという愛しか知らないのです。そうになってしまうのです。けれども、神がまず愛しているということを、絶えず受け入れてください。そして私たちが神を愛するのは、あくまでも神の愛への応答なのです。

そして、ここまでヨハネは愛について話して、それで兄弟を憎むということについて、はっきりと語っています。

²⁰ 神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。

偽り者、嘘つきなのです！キリスト者が嘘をついている時、何が嘘なのか？というと、兄弟を憎んでいる時です。何か私たちは、どこかでごまかそうとしますね。

そして、とても明らかな論理をヨハネは語っています。神を愛するということは、発言するだけでごまかすことができます。神は目に見えないからです。目に見えないから、本当に愛しているかどうか推し量ることができません。けれども、目に見える兄弟であれば、ごまかすことができません。

しかも、目に見える兄弟を愛することの方が、目に見えない神を愛することより、やさしいのです。目に見えないものを、どうやって愛するのか？ですから、二重で偽りです。

ですから、神を愛しているかどうかを推し量る時に、兄弟を愛していることが、最低限、神の愛があることの証しであります。

²¹ 神を愛する者は兄弟も愛すべきです。私たちはこの命令を神から受けています。

これが結論です。神を愛しているというならば、兄弟を愛するべきだということです。しかも、ヨハネは、これは神からの命令であると明言しています。選択でもなく、好みでもないのです。

この手紙は、イエスご自身が直接、命じられた時から 60 年ぐらい経っていることを思い出してください。直接、主から命じられていることなのですが、時を経て、知識という名のもとに兄弟を憎んでいる者たちが多くいたのです。しかも、教師の中にそういうことをそそのかしている者たちがいたのです。これはちょうど、イスラエルの民が、あれだけ偶像礼拝をしてはいけないと言われていても、時を経ると、カナン人など周囲の民よりも、ひどい偶像礼拝を行っていたところにまで至ったことから、よくわかります。

神を愛しているといいながら、兄弟を憎んでいるというのは、言語道断、論外な話なのです。それを、まことしやかに「知識」という名の下で、正しいことだと吹聴しているのが、反キリストだということですね。長老ヨハネは、天に召される前に、このことを思い起こさせて、いつまでも守るべき、不変の神の命令なのだということを教えています。私たちも、その命令を守って、受け継いでいきましょう。